

●中学生の部

環境大臣賞 上野 忠峰 うえの ただみね
「傷だらけの手」

「今夜は今年一番の冷え込みが予想されます。暖かくしてお過ごし下さい。」テレビで気象予報士が言っていた。

僕の毎日の日課は、愛犬3匹と散歩に行く事だ。寒い夜、みんなで走って体を温めたりジャレて遊んでいたら母が「静かに！何か聞こえる！」と言った。僕は耳を澄ました。すると聞こえた！「ミャーミャー」と鳴く細い声。僕は声がする方へ走った。声の近くまで行くと暗闇の中で寒さに震えている仔猫がいた。すぐに抱き上げようと手を差し伸べたけれど母に止められた。カゴに入れて家に連れてきた。玄関をストーブで暖めて一晚を過ごしてもらった。翌朝、猫をすぐに病院へ連れて行って健康診断と感染症の検査、予防接種を受けた。幸い病気も無く元気だった。先生が「どこかで飼われていたんだろうけど、お腹に強く噛まれた傷がある。そこにいた動物と仲よくできやんかったんやろな」と教えてくれた。「だから？」僕は怒りが込み上げてきた。

僕はこの子にパルと名付けた。パルは、とてもヤンチャな男の子だった。愛犬達ともすぐにうちとけてじゃれあって遊んでいた。

その日からパルの里親探しが始まった。まずは警察に届けた。病院で精密検査も受けた。県内の保護施設から譲渡会の情報を得た。その間僕はパルと沢山触れ合った。パルは気に入らなければ本気でかんできたり「シャー！！」と怒って爪を立てたりかみついてきた。僕の手は傷だらけになった。それでもパルが人に慣れる事、人を信頼してくれる子になって欲しくて僕は手の傷なんて気にしなかった。それからパルは僕達と3ヶ月間一緒に過ごした。譲渡会に出しても「雄はいらない」「柄が嫌」と言われてなかなか決まらなかった。こんなに可愛いのに…。パルに申し訳ないと思った。しかしボランティアさんは諦めなかった。パルの魅力を一生懸命伝えてくれた。そして、パルに会ってみたい。と言う人が現れた。母は、パルに会ってもらう前に何度も何度も連絡を取り合って意志確認をしていた。二度とパルを不幸にしない為だ。

パルのトライアルが終わり、パルは第二の人生を歩み出した。さみしかったけれど幸せになるんだな。と安心もした。

僕はパルと過ごした時間は短かったけれど色んな事を感じた。ボランティアの人とも知り合えて勉強になった。犬や猫を捨てる事は犯罪と言うこと。犬や猫にだって気持ちはある。人間に振り回されて痛めつけられて傷ついて。そんな事はあってはならない。ボランティアさんの手は傷だらけだった。僕よりも何倍も傷だらけだった。でも、笑って教えてくれた。「これは消える傷、すぐに治る傷やから大丈夫。捨てられた子の心の傷に比べたら平気だよ。この子達の傷は消えないからね」と。ボランティアさんや僕の手は、保護された子の心の叫びだと思ふ。怖くて辛くて不安で仕方ないのだと思ふ。捨てられた子は何も悪くない。悪いのは捨てた人間。万が一、何かの事情で飼えなくなったのなら、責任を持って幸せになる方法を考えるべきだと僕は思う。それが出来ないのなら、ただの犯罪者。恥しい人間だと思ふ。動物を飼うと言う事は大きな責任だと言うことを理解して欲しいし、僕は1匹でも多くの保護された動物の幸せと、捨てる事が起きないように声をあげていこうと思ふ。